

火



河井祥子

東京付近では、プラタナス、イチョウウと次々に葉を落とし、北風が吹きはじめました。“たきび”のシーズンに入ります。枯葉を集めた“たきび”の中にお芋を入れ、焼芋をいたしましょう。早く焼けないかしらと、小さな手いっぱい枯葉をよいしょ、よいしょ。煙に追いかけられ、涙を流しながら。

十二月のテーマは“火”。

暖房の火、クリスマス火、火災の火と、火を身近に考え、接する月でありましょう。

今日のおみやげはKちゃんとMちゃん。入園以来、ほとんど毎日家に持ち帰るおみやげ、中身は？ 汚れたエプロン、洗濯した靴下、それともハンカチかしら。今日こそ汚さないでと、無精な保育者の私は内心願っているのですけれど、その期待はなかなかかなえられそうにもありません。幼稚園の中にある程度の水と土であれば、少々洋服が汚れようとも、

危険はありません。否、それ以上に全身でぶつかっていける貴重な遊具の一つでしょう。“土”“水”はかなり保育の場面で大きなかわりを持っています。その中でくりひろげられる活動は、広く、充実していきます。

植物に“土”“水”“光”が必要なように、“光”そのものと熱量の多い“火”は子どもになくてはならないものは、その“火”を考えてみることにいたしましょう。

「ウーウー、ウーウー」火事ですすよ。入園したての三歳児Kちゃん、ジャングルをおうちにしてあそんでいても、積木で高速道路をつくってあそんでいても、消防自動車がやってくる。

「たいへんです、早く逃げて下さい」

「もう消えました、大丈夫です」

そしてまた、もとの遊びを続けます。そのような遊びが断

統的に一学期の終りまでつづきました。あとになって、K君の家が入園前に火災にあったということがわかりました。

「火の用心」ストーブの火、コンロの火、冬になりますと火が生活の中に入ってきます。その近くで遊んでいると「やけどをしますよ」と注意され、直接体験しなくても、火の恐ろしさを知っていくのです。

保育の場面での「火」は「たきび」だけでしょうか。ホラ、クッキーの焼きたいにおいがしてきました。上手に焼けたようですよ。こんな時にも「火」がないといけません。物を煮たきする火、暖をとる火、「火」にそーっと聞いてみましょう。もっとたくさん教えてくれるでしょう。その大切さと、美しさを。

「火」をみていると神秘的な感があります。クリスマスツリーのロソクの火、マッチ売りの少女は、最後に残ったマッチを全部すりました。その炎の中におばあさんを見ました。炎と共にマッチ売りの少女は、天国に昇っていきましました。翌朝、そこにはマッチの燃えかすが残っていました。マッチの炎は、少女を天国につれていってくれたのです。そんな力が

マッチの炎にはあつたのです。同じマッチ一本の火でも、畏れる火とも、恐れる火にもなるのでしょうか。このマッチがどう人間とかかわるかは、私たち使う人の手に、心にかかっているのかもしれない。

「ボクは、火というところでもI先生のことを思い出す」と編集会議の時のT先生。確かにI先生は「火のように燃えている」先生なのです。情熱を持った先生なのです。うっかりすると頭からどなられかねないけれど。

赤ちゃんは「火がついたように泣く」し、さびしい時は「火が消えたように」泣きます。

和紙でこよりを作って置いておきました。ふと見ると、お部屋の入口に椅子を並べ、外に向かってちょこんと腰掛けている子ども。

「何しているの？」

「は・な・び・しずかにしないときえちやうじやない」

こよりの先をつまんでじーっと見つめる眸の中に、色とりどりの火花が光って居りました。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)